

2025年3月30日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教31「目指す地へ」
出エジプト3：7～10、ヨハネ6：16～21

四つの福音書が五千人の供食の話を伝えています、そのうちの三つ（マタイ、マルコ、ヨハネ）が五千人の供食の話に続いて、今日の海上歩行の話を伝えます。ここで注目したい言葉が、20節にあるイエスさまの言葉「わたしだ。恐れることはない」という言葉です。この「わたしだ」という言葉はエゴ・エイミ「わたしは～である」という言葉ですが、ヨハネ福音書では特に重要な言葉の一つです。「わたしが命のパンである」（6：35）、「わたしは世の光である」（8：12）「わたしは良い羊飼いです」（10：14）「わたしは道であり、真理であり、命である」（14：6）そのようにヨハネ福音書に何度もエゴ・エイミが使われています。興味深いのは、この言葉はモーセの召命の話で神さまが御自分を「わたしはある。わたしはあるというものだ」（出エジプト3：14）と自己紹介された時の「わたしはある」がギリシア語の旧約聖書ではエゴ・エイミなのです。ここで旧約聖書と新約聖書がつながります。

それだけではありません。例えば、前回の6章3節で「イエスは山に登り」とあります。15節でも「ひとりてまた山に退かれた」イエスさまがひとり山に登られる。これもモーセがシナイ山に一人登って十戒を受けるところと重なります。また4節には「過越祭」が出てきます。これも出エジプト記に由来しています。イスラエルの人々がエジプトを脱出する。その時に犠牲の小羊が屠られ食されます。さらにこの後のところを読み進めていきますと、「わたしたちの先祖は、荒野でマナを食べました」（6：31）とあります。マナの話は出エジプト記に出てきます。これらは五千人の供食と深くつながっているのではないのでしょうか。

そうなるに出エジプト記とのつながりを無視することはできません。湖を渡ると聞いてすぐ思い浮かぶのはあの葦の海の奇跡でしょう。エジプトを脱出して間もなく、後ろからエジプト軍が追いかけてくる。前には紅海が広がっている。絶体絶命のとき、モーセが海を分けて、イスラエルの民が海の中を通り向こう岸へ渡っていくことができました。神さまが行く手を開いてくださったのです。それゆえ五千人の供食も海上歩行も、それは第二の出エジプトと理解することができると思います。21節に「すると間もなく、舟は目指す地に着いた」とあります。この目指す地とは、単に湖の向こう岸ということではなく、神さまが与えると約束された地、神の国、わたしたちの人生の目的地がここに示されているのです。

そこで改めて、この海上歩行の話を見てみましょう。「イエスはまだ彼らのところに来ておられなかった」（17節）とありますから、この時は、弟子たちだけで行動していたことが分かります。イエスさまが不在なのです。いつも一緒なのに、どういう理由なのかわかりませんが、この時はイエスさまがいない。ただでさえ心細いところを、あたりは「既に暗くなっていた」（17節）のです。そして強い風が吹いて湖が荒れ始めた。夜の海は怖い。死を感じさせます。また19節には「二十五ないし三十スタディオンばかり漕ぎ出した」とあります。一スタディオンは約二百メートルで計算すると五キロほどです。漕ぎ出して五キロというのは、湖の中ほどのところでしょう。もう引き戻せない。かといって湖が荒れているので前にも進めない。これは、まさに出エジプトの葦の海の状況です。前にも後ろに進めない。絶体絶命、完全に行き詰まっている状況です。

葦の海の奇跡と重ね合わせて考えた時に、この荒れた夜の湖は、死の支配と捉えることができるように思います。イスラエルの人々を追いかけてきたエジプト軍は海に飲み込まれ全滅します。旧約聖書において「海」というのは死の支配であり、天地創造の前の混沌を意味します。死という現実と直面する時に、わたしたちは冷静さを失うでしょう。慌てふためくと思います。それは自分ではどうすることもできない力がそこに働くからです。もはや自分の経験も役に立たない。人間の無力さ、限界が露わにさせられる。こういう時はパニックになり、冷静に判断したり、落ち着いて行動できなくなります。「イエスが湖の上を歩いて舟に近づいて来られるのを見て、彼らは恐れた」（19節）他の福音書ではイエスさまを幽霊と違って怖がる様子が記されています。幽霊というのも、死に支配されている存在です。

でもその死の只中でイエスさまの声が聞こえるのです。「わたしだ。恐れることはない」わたしはこの声が聞こえるのは慰め以外の何ものでもないと思います。どうしてこの声を聞けるのか。それはイエスさまが十字架で死んでくださったからです。わたしたちが恐れてやまない死の中へ入ってきてくださった。今、教会は受難節の中にありますが、イエスさまのお苦しみの意味はそこにあります。これは書簡ですが、ペトロの手紙Ⅰに「キリストは捕らわれていた霊たちのところへ行って宣教されました。この霊たちは、ノアの時代に箱舟が作られていた間、神が忍耐して待っておられたのに従わなかった者です」（3：19～20）とあります。神さまに従わなかった者、それはわたしたちです。それゆえに死に定められた、死の中に捕らわれているわたしたちを救われるためにイエスさまは十字架におかかりになられました。そして三日目によみがえられた。そこからわたしたちを連れ出して、目指す地へ、永遠の神さまの御国へ導き入れるために他なりません。イエスさまと一緒にわたしたちは海を渡り、必ず向こう岸へとたどり着くのです。今日の御言葉にはその約束がはっきりと示されています。

三月の最後の日曜日ですが、今月も振り返ればいろいろなことがありました。大浜の平野浄子さんが天に召されたのも今月でした。亡くなられる前に何度かご自宅を訪問しています。いつも明るい浄子さんですが、時々不安になられることもありました。宏さんが隣のベッドに寝ておられましたが、その時は起き上がって浄子さんの背中をさすっておられました。わたしが訪問しますと「よかった」と言われ安心されました。聖書を読み祈りました。浄子さんは、宏さんが背中をさすられるとき、わたしが聖書を読み祈るときに、「わたしだ。恐れることはない」というイエスさまの声を聞いていたと信じます。そしてイエスさまと共に目指す地に行かれました。わたしたちの人生もそのようにイエスさまが導いてくださいます。

天の父よ。死の不安があります。恐れがあります。けれどもその時にイエスさまが共におられ「わたしだ。恐れることはない」との御声を聞くことができる幸いを感謝いたします。そのためにイエスさまが十字架におかかりになられ、三日目によみがえられました。そのようにしてこの人生を目指す地へ導いてくださいます。どうぞこのことを信じて希望を持って歩む者とさせてください。主の御名によって祈ります。アーメン。